

線形といえば, (by 山田)

「線形○○」「1次○○」と言ったら、

足し算 (+) と スカラー倍 について何か条件を課した

と心得るべし. 教科書の索引を使って, いろいろな用語の意味 (課した条件) を調べよ. ここではいくつかまとめておく. 以下では V, W などは空集合ではないとする.

1 (p.103) V を \mathbb{R}^n (n 次元数ベクトル空間) とする. 次の2つの演算に注目する.

(1) 和 が定義されている. つまり

$$\mathbf{a}, \mathbf{b} \in V \Rightarrow \mathbf{a} + \mathbf{b} \in V$$

「 \mathbf{a}, \mathbf{b} が V に属すならば, 和 $\mathbf{a} + \mathbf{b}$ も V に属す」

厳密に数式記号を用いると $\forall \mathbf{a}, \forall \mathbf{b} \in V \Rightarrow \mathbf{a} + \mathbf{b} \in V$ であるが, 「 \Rightarrow “ならば”」は “である全ての場合に” と解釈して通常 「 \forall “任意の”」は省略される. 以下では全て省略形で述べる.

(2) スカラー倍 が定義されている. つまり

$$k \in \mathbb{R}, \mathbf{a} \in V \Rightarrow k\mathbf{a} \in V$$

(1+2: 合わせ技) V 内で1次結合が定義される. つまり

$$k_1, k_2 \in \mathbb{R}, \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \in V \Rightarrow k_1\mathbf{a}_1 + k_2\mathbf{a}_2 \in V$$

・ $k_1 = k_2 = 1$ にすれば条件 (1) を, $k_2 = 0$ にすれば条件 (2) を導く.

● 2つの演算 “足し算” と “スカラー倍” を定義された集合を **線形空間** という (p.103).

2 (p.31, p.108) \mathbf{a} が $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$ の **1次結合** であるとは,

n 個のスカラー c_1, c_2, \dots, c_n が存在して
 $\mathbf{a} = c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_n\mathbf{a}_n$ と表わされること.

3 (p.112) $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ の **1次関係式** とは, それらの1次結合で $\mathbf{0}$ を表す

$$c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r = \mathbf{0}$$

の形の式のこと. すべての係数 c_i が0のとき「自明な1次関係式」という.
逆に, 少なくとも1つの係数が0でないとき「非自明な1次関係式」という.

4 (p.53, p.112) (V 内で) ベクトルの集合 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ が **1次独立** であるとは,

「『 $c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r = \mathbf{0}$ ならば $c_1 = c_2 = \dots = c_r = 0$ 』が成り立つ」こと
言い換えると

「 $c_1 = \dots = c_r = 0$ 以外では $c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r = \mathbf{0}$ は成り立たない」こと

を表す. スカラーの $0 \in \mathbb{R}$ とゼロベクトル $\mathbf{0} \in V$ の区別に注意. 1次独立でないことを1次従属という. つまり, r 個の元 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ が **1次従属** であるとは,

「 $c_1 = \dots = c_r = 0$ 以外で $c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r = \mathbf{0}$
となる係数 c_1, c_2, \dots, c_r が存在する」こと

を表す. つまり「非自明な 1次関係式が存在する」ことを表す.

$r = 2$ (2個 \mathbf{a}, \mathbf{b}) のとき:

\mathbf{a} と \mathbf{b} が1次従属 $\Leftrightarrow \mathbf{a} = \mathbf{0}$ または $\mathbf{b} = \mathbf{0}$ または $\exists c, \mathbf{a} = c\mathbf{b}$ (平行).

$r = 3$ (3個 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$) のとき: $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ が1次従属となるのは,

- 3つのうち少なくとも1つが $\mathbf{0}$,
- 3つのうちある2つまたは3つ全てが平行,
- $\mathbf{a}_3 = c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2$ の形の関係式が成り立つ,

のいずれかの場合であるが, “場合”で説明するのは面倒.

例1: \mathbb{R}^3 内で $\mathbf{a}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$, $\mathbf{a}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}$, $\mathbf{a}_3 = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$ の3つは1次独立. なぜなら

$x_1\mathbf{a}_1 + x_2\mathbf{a}_2 + x_3\mathbf{a}_3 = \mathbf{0}$ を解くと $x_1 = x_2 = x_3 = 0$ となるため.

例2: \mathbb{R}^3 内で $\mathbf{b}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}$, $\mathbf{b}_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix}$, $\mathbf{b}_3 = \begin{bmatrix} 5 \\ 3 \\ 1 \end{bmatrix}$ の3つは1次従属. なぜなら

非自明な1次関係式 $-7\mathbf{b}_1 + 2\mathbf{b}_2 + \mathbf{b}_3 = \mathbf{0}$ が成り立つ.

5 (p.105) \mathbb{R}^n 内の (or 線形空間 V の) 空でない部分集合 W が V の **線形部分空間** であるとは, 次の3条件が成り立つこと

(0) $\mathbf{0} \in W$

(1) W が 和 に関して閉じている. つまり $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in W \Rightarrow \mathbf{a} + \mathbf{b} \in W$

(2) W が スカラー倍 に関して閉じている. つまり $k \in \mathbb{R}, \mathbf{a} \in W \Rightarrow k\mathbf{a} \in W$

(1+2: 合わせ技) W が1次結合に関して閉じている. つまり

$$k_1, k_2 \in \mathbb{R}, \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \in W \Rightarrow k_1\mathbf{a}_1 + k_2\mathbf{a}_2 \in W$$

例1 : $V = \mathbb{R}^n$ とする. $m \times n$ 行列 A に対して, $A\mathbf{x} = \mathbf{0}$ の解の集合

$N(A) = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid A\mathbf{x} = \mathbf{0}\}$ は \mathbb{R}^n の部分空間となる.

これを「 $A\mathbf{x} = \mathbf{0}$ の解空間」, 「 A の零空間」という (p.107).

例2 : $V = \mathbb{R}[x]_n$ (n 次以下の多項式のなす線形空間) のとき $\alpha \in \mathbb{R}$ に対し

$X_\alpha := \{f \in \mathbb{R}[x]_n \mid f(\alpha) = 0\}$ とする. X_α は $\mathbb{R}[x]_n$ の部分空間である.

6 (p.108) V 内で $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ が生成する部分空間 (張られる部分空間)

(記号は $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r \rangle$) とは, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ の1次結合の集合, つまり

$$\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r \rangle = \{c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \dots + c_r\mathbf{a}_r \mid \text{各 } c_i \in \mathbb{R}\}.$$

「 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ が V を生成する」とは $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r \rangle = V$, つまり

「 V に属す任意のベクトルが $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r$ の1次結合で表される」こと.

・ $m \times n$ 行列 A の列ベクトル分割 $A = [\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n]$ に対して

$$C(A) = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n \rangle$$

は \mathbb{R}^m の部分空間であり「 A の列空間」という.

7 (p.117) 線形空間の基底と次元.

線形空間 V の中の有限個のベクトルの組 $\mathcal{B} = (\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n)$ が,

(1) V を生成し なおかつ (2) 1次独立

のとき, \mathcal{B} を V の基底という. 実は, 次のことが成り立つ.

定理 18.2 : 線形空間 V が, 有限個のベクトルからなる基底をもつ

(p.126) とき, 基底の取りかたは何通りもあるが,
基底をなすベクトルの個数は変化しない.

そこで, この「ベクトルの個数」を V の次元 ($\dim V$) という.

(0次元 は点, 1次元 は線, 2次元 は面, 3次元 は空間, ...)

例 : $V = \mathbb{R}^n$ (次元は n) のとき, \mathbf{e}_i を「 i 番目のみ 1 で他が全て 0 のベクトル」とすると $(\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \dots, \mathbf{e}_n)$ は \mathbb{R}^n の標準基底と呼ばれる.

$$\mathbb{R}^3 \text{ の標準基底 : } \left(\mathbf{e}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \mathbf{e}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \mathbf{e}_3 = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} \right)$$

8 (p.142) V, W は線形空間とする. **写像** $f: V \rightarrow W$ が**線形写像**であるとは, f が次の条件をみたすこと

(1) f は 和 を保つ. つまり「和の像は像の和」+ が外に出せる.

$$f(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b}) \quad \text{in } W$$

左辺の + は V 内の和, 右辺の + は W 内の和, 同じものではない.

(2) f は スカラー倍 を保つ. つまり「 k 倍の像は像の k 倍」定数倍が外に出せる.

$$f(k\mathbf{a}) = kf(\mathbf{a}) \quad \text{in } W$$

(1+2: 合わせ技) : f は 1 次結合を保つ.

$$f(k_1\mathbf{a}_1 + k_2\mathbf{a}_2) = k_1f(\mathbf{a}_1) + k_2f(\mathbf{a}_2) \quad \text{in } W$$

例 1 : 行列の定める写像 (p.153). $m \times n$ 行列 A に対して

$$\begin{aligned} f_A : \mathbb{R}^n &\rightarrow \mathbb{R}^m \\ \mathbf{x} &\mapsto \mathbf{y} = f_A(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}. \end{aligned}$$

例 2 : 微分 (p.144).

$$\begin{aligned} \frac{d}{dx} : C^\infty(\mathbb{R}) &\rightarrow C^\infty(\mathbb{R}) \\ f &\mapsto \frac{df}{dx}. \end{aligned}$$

$(f+g)' = f' + g'$ や $(cf)' = cf'$ ($c \in \mathbb{R}$) と習っただろう.

線形空間の例 (p.104) — \mathbb{R}^n だけではない —

2つの演算“和”と“スカラー倍”を定義された集合を **線形空間** という.

例 1 : 平面や空間のベクトルの集合としての \mathbb{R}^2 (2次元), \mathbb{R}^3 (3次元), それらの一般化としての \mathbb{R}^n (n 次元).

例 2 : x に関する n 次以下の多項式の集合

$$\mathbb{R}[x]_n = \{a_n x^n + \cdots + a_1 x + a_0 \mid a_i \in \mathbb{R}\} \quad (n+1 \text{次元}).$$

例 3 : $m \times n$ 行列の集合 $M_{m \times n}$ (mn 次元).

例 4 : \mathbb{R} 上の C^∞ (あるいは C^n) 級関数の集合 $C^\infty(\mathbb{R}), C^n(\mathbb{R})$, (次元は無限).

「線形○○」「1次○○」のような用語は本来, 一般の線形空間について定義される.

9 (p.119) 座標

n 次元の線形空間 V に基底 $\mathcal{B} = (\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n)$ を1つ固定する.

「基底」の定義 (1次独立, 生成性) から V の各ベクトル \mathbf{v} は

$$\mathbf{v} = c_1 \mathbf{b}_1 + c_2 \mathbf{b}_2 + \dots + c_n \mathbf{b}_n \quad (\text{各 } c_i \in \mathbb{R})$$

と基底の1次結合の形に表される. しかも, その係数 c_1, \dots, c_n は, 1つの \mathbf{v} に対し

て1通りに限られる. そこで, 係数を順に並べた $\begin{bmatrix} c_1 \\ \vdots \\ c_n \end{bmatrix} \in \mathbb{R}^n$ をこう呼ぶ:

基底 \mathcal{B} に関する \mathbf{v} の座標 (記号: $[\mathbf{v}]_{\mathcal{B}}$)

用語の意味を確認するために例文を紹介する.

- $V = \mathbb{R}[x]_2$ (2次以下の多項式のなす線形空間) とする.

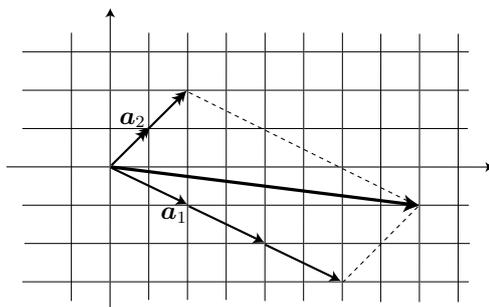
[例文] “ベクトル” $f = 7x^2 - 3x + 4$ の, 基底 $\mathcal{P} = \{p_2 = x^2, p_1 = x, p_0 = 1\}$

に関する座標は $\begin{bmatrix} 7 \\ -3 \\ 4 \end{bmatrix}$. その意味は $f = 7p_2 + (-3)p_1 + 4p_0$

- $V = \mathbb{R}^2$ とする.

[例文] \mathbb{R}^2 のベクトル $\begin{bmatrix} 8 \\ -1 \end{bmatrix}$ の, 基底 $\left\langle \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} \right\rangle$ に関する座標は $\begin{bmatrix} 3 \\ 2 \end{bmatrix}$.

その意味は $\begin{bmatrix} 8 \\ -1 \end{bmatrix} = 3 \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} + 2 \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$ に他ならない (図から意味を理解せよ!).



このポイントは

線形空間 V が, 基底 \mathcal{B} を固定したことによって, \mathbb{R}^n と同一視されたこと

$$V \xrightarrow{\mathcal{B}} \mathbb{R}^n$$

にある. ここで, 集合 X と Y の 同一視 とは, X の各元に対して Y の元を1対1に対応させることである. \mathbb{R}^n はよく理解された集合であることに注意.

10 1次結合の表記法 便利 (p.115)

• 例えば, 1次結合 $c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \cdots + c_r\mathbf{a}_r$ は, 行列の成分計算を応用して, 次の右辺のように表示すると便利である.

$$c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \cdots + c_r\mathbf{a}_r = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_r) \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_r \end{bmatrix}$$

• この表示法をさらに応用して, 2つ以上の1次結合 (左辺) を表すために,

$$(\mathbf{a}_{11}\mathbf{a}_1 + \mathbf{a}_{21}\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_{12}\mathbf{a}_1 + \mathbf{a}_{22}\mathbf{a}_2) = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) \begin{bmatrix} \mathbf{a}_{11} & \mathbf{a}_{12} \\ \mathbf{a}_{21} & \mathbf{a}_{22} \end{bmatrix}$$

の (右辺) のように表すのが便利である. 例えば

$$(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2) = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) \begin{bmatrix} \mathbf{a}_{11} & \mathbf{a}_{12} \\ \mathbf{a}_{21} & \mathbf{a}_{22} \end{bmatrix} \quad \text{または} \quad (\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2) = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) A$$

と書いたら, その意味は次の通り.

\mathbf{a}_{12} と \mathbf{a}_{21} の配置に注意!

$$\begin{cases} \mathbf{b}_1 = \mathbf{a}_{11}\mathbf{a}_1 + \mathbf{a}_{21}\mathbf{a}_2 \\ \mathbf{b}_2 = \mathbf{a}_{12}\mathbf{a}_1 + \mathbf{a}_{22}\mathbf{a}_2 \end{cases}$$

特に, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_r$ が \mathbb{R}^m の (縦) ベクトルの場合は, 成分をそのまま配置して行列計算に持ち込むことができる (行列の列分割 (p.31) とも整合する). 例えば,

$$\mathbf{a}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{b}_1 = \begin{bmatrix} 3 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{b}_2 = \begin{bmatrix} 5 \\ 9 \\ 13 \end{bmatrix}$$

とすると, ベクトルの関係式

$$\begin{cases} \mathbf{b}_1 = 3\mathbf{a}_1 + (-2)\mathbf{a}_2 \\ \mathbf{b}_2 = 5\mathbf{a}_1 + 4\mathbf{a}_2 \end{cases} \quad \text{つまり} \quad (\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2) = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2) \begin{bmatrix} 3 & 5 \\ -2 & 4 \end{bmatrix}$$

が成り立ち, 成分の関係は

$$\begin{bmatrix} 3 & 5 \\ 1 & 9 \\ -1 & 13 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 1 & 1 \\ 1 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 3 & 5 \\ -2 & 4 \end{bmatrix}.$$

確認

$$\left(\begin{bmatrix} 3 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 5 \\ 9 \\ 13 \end{bmatrix} \right) = \left(\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix} \right) \begin{bmatrix} 3 & 5 \\ -2 & 4 \end{bmatrix} = \left(3 \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix} - 2 \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}, 5 \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix} + 4 \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix} \right).$$